



北稲から僧坊、菱田方面を望む（昭和 47 年ごろ）

## 失われた農村の子供の遊び

安宅 吉次

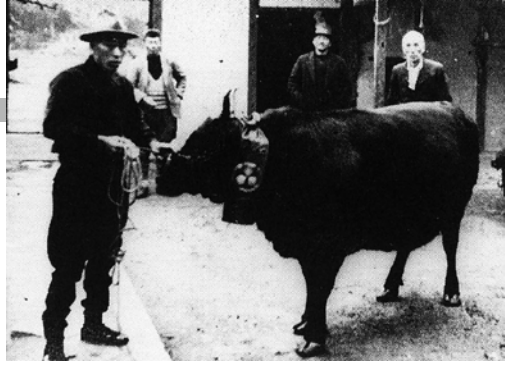
近ごろよく教育のことが問題になります。一方では、塾をはじめ教育過剰のことなど、一方では、非行やいじめの問題などです。その間で、子供の健全な遊びや成長を願う声も高まっています。

それについても思うのですが、昔は、生活と密着していた子供の遊びや喜びがありました。

それについて書き記しておきたいと思います。

私は大正九年の生まれで、私の地区（僧坊）はほとんどが農家でもありました。

長男としてうぶの声をあげた私は、小学校五、六年生位から弟妹を背負って、松茸取りも稲田の溝掘りにも行きました。特に松茸取りは、スキを稲田に放っておいて身軽く石段を登って行ったものです。お宮さんの裏



金 600 円の値がついた牛（昭和 14 年ごろ）

山には一坪位に列をなし松茸があがっていました。また、宝光寺山といって、僧坊区と谷区の境にある山の道脇に、二十四、五センチメートル位もある松茸を二十四本も取ったこともありました。誰かが見ていないかと身振りしたものでしたが、松茸取りが面白くて病つきとなり、今でも秋の彼岸から十月十七日のお祭りまで、とても懐かしい思い出です。

今の子供は、牛や馬がうまれて初めて立ち上がるときに、前足から立ち上がるのか後ろ足から立ち上がるのかも知らないようです。牛は後足から、馬は前足から立ちます。

昔の子供は、こんなことは生活経験のなかからよく知っていたのでした。

地区の農家では子牛を生ませるのが流行り、私の家も子牛を生ますことを考えまして、種付にF家のおじさん宅に行き、交尾のお世話になりました。二十日位でモウモウと鳴けば、もう一度交尾させるから、といわれましたが、一回で子牛が宿つたことを思い出します。

やがて親牛は、人間の出産と同じく十月十日、腹に子を宿し出産です。朝六時頃、馬屋に父といっしょに見にいったら、子牛のウブ毛を親牛が嘗めて、後産という汚物も自分が食べたのか敷物がとつても美しかったこと

を鮮やかに覚えていきます。

我われは役牛として飼っていたものの、牛は家族の一員でもありましたので、それぞれ玄関内で起居を共にした家もありました。

農繁期には、十一、二歳の頃から弟妹を背負って、木津川の堤で昼弁当を食べたものでした。木津川に帆かけ船が木津方面、八幡方面に交差して通っているのを見たものです。木津方面へは主に、陶器、肥料、醤油を積んだのを見たことがあります。まさしく精華町の写真集『町史編さん参考資料版二「写真でみる暮らしと風景」』の通りで、それは単に景色だけではなく、その風景のなかに自分の子供の頃の生活とその中の生活や遊びの喜びも、あざやかに甦ってきます。

ふるさとの様子もしだいに変わってきましたが、子供たちの健全な成長を願わずにはおられません。